

令和 元年 5月 24日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284122

研究課題名(和文)阿蘇地域を中心とした古墳時代の九州島における情報伝達・文物交流の実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study of information transmission and cultural exchange in Kyushu Island in the Kofun period through the Aso area

研究代表者

杉井 健 (SUGII, Takeshi)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：90263178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：阿蘇地域に築かれた古墳 - 熊本県阿蘇市平原古墳群、阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳、大分県豊後大野市漆生古墳群 - のフィールド調査、および阿蘇地域に関連する古墳出土資料 - 各地の古墳出土のベンガラ、熊本県高森町高塚横穴群出土遺物 - の分析を行った。その結果、阿蘇地域は、とくに古墳時代中期以降になると、九州島の東西をつなぐ情報伝達・文物交流ルートの結節点として重要な役割を果たしていること、また、高塚横穴群には南九州地域に特徴的な遺物が多くみられたことから、南九州地域とも密接な交流関係があったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

阿蘇地域は九州島の中央に位置することから、古来、九州島の東西南北を結ぶ情報伝達・文物交流ルートの結節点の役割を果たしていたと考えられる。しかし、古墳時代の研究においては沿岸ルートが重視されるあまり、阿蘇地域を介した内陸ルートの検討はあまり行われてこなかった。本研究はそこに焦点を当て、阿蘇地域に立地する古墳のフィールド調査を通じて、古墳時代中期(5世紀)以降には阿蘇地域が九州島の東西をつなぐ重要な位置にあったことを明らかにした。このことは、阿蘇谷に肥後一の宮の阿蘇神社が設立されることなど、現在の阿蘇カルデラ盆地における人々の営みの直接の源流を探るうえでも重要な成果である。

研究成果の概要(英文)：We conducted field surveys of several tombs in the Aso area, that is, the Hirabaru mounded tomb group, the Kamimikura tumulus, the Shimomikura tumulus, and the Urusho mounded tomb group. And we analyzed the artifacts related to tombs in the Aso area, that is, red iron oxide (bengara) and artifacts excavated from the Takatsuka rock-cut tomb group.

As a result, it became clear that the Aso area played an important role as a core of the information transmission and cultural exchange linking the east and west of Kyushu Island, especially after the middle stage of the Kofun period.

Furthermore, as many artifacts characteristic of the South Kyushu Island area were excavated from the Takatsuka rock-cut tomb group, it was clear that the Aso area had a close relationship with the southern Kyushu Island area.

研究分野：人文学

キーワード：考古学 古墳 阿蘇 ルート 高塚横穴群 平原古墳群 上御倉・下御倉古墳 漆生古墳群

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者・杉井健は、熊本県地域の古墳時代の様相を解明すべく、継続的に県内各地の古墳やその出土遺物の調査・研究を行っている。そうしたなかで、天草島嶼部に立地する千崎古墳群等の調査を通じて砂岩製箱式石棺や石障系横穴式石室などの在地墓制の実態を明らかにし、また天草島嶼部の沿岸を南北につたうルート的重要性を指摘した。また、合志川流域所在のマ口塚古墳や阿蘇谷所在の長目塚古墳から出土した遺物の調査を通じて、古墳時代武器武具の構造を明らかにするとともに、古墳時代中期に内陸ルート的重要性が増大することを指摘した。

こうした研究の蓄積を受け、九州島の各地を結ぶ内陸ルートの結節点としての阿蘇地域に着目するようになった。

阿蘇地域は九州島の中央に位置することから、旧石器時代や縄文時代の研究においては、情報伝達・文物交流の要衝として高く評価されてきた。しかし、弥生時代の研究になると、「貝の道」論に代表されるように九州島西岸を伝う海のルートがとくに強調されるようになり、また古墳時代の研究においても九州島の西岸あるいは東岸ルートを重視する傾向にある。その一方で、阿蘇地域を経由する内陸ルートの検討はあまり行われていない。

しかし、弥生時代後期の阿蘇地域で出土する鉄器やベンガラ の数量は北部九州地域をしのぐものであり、また古墳時代中期前半に阿蘇谷に築かれた長目塚古墳は当該時期の熊本県地域では最大規模の前方後円墳であるなど、弥生時代から古墳時代においても阿蘇地域はきわめて注目すべき地域と考えられる。ただ、古墳に関しては近年の調査事例がほとんどなく、またかつての古墳発掘資料の多くが未報告のままであるなどの問題を抱えており、外輪山を含めた阿蘇地域全体を総合的に検討して古墳時代史のなかに位置付けるといった試みは、ほとんどなされてこなかった。

そこで、阿蘇地域に所在する古墳のフィールド調査などを通じて、古墳時代における阿蘇地域の様相、および阿蘇地域を介した内陸ルートの実態の解明に向けた研究を深化させるべく、本研究課題を構想するに至ったのである。

2. 研究の目的

九州島中央に位置する阿蘇地域に着目し、そこに営まれた古墳を考古学的に調査・分析することによって、古墳時代における阿蘇地域の動態を明らかにする。さらに、従来は古墳時代の九州島における情報伝達・文物交流のルートについてはその西岸や東岸を南北に伝う海のルートが重視されがちであったが、本研究では、九州島西側の熊本県地域および東側の大分県地域の古墳分析を重点的に行い、あわせて阿蘇地域北部の筑後川流域および南部の緑川や五ヶ瀬川流域の古墳動向にも注意を払いながら、これまであまり注目されてこなかった古墳時代における阿蘇地域を介した九州島の東西南北を結ぶ内陸ルートのあり方を実証的に提示し、阿蘇地域が古墳時代の九州島においてどのような役割を担っていたのか、その歴史的位置付けについて考察することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 阿蘇地域における首長墓系譜変動を分析するうえで鍵となり、かつ内陸ルートの様相を解明するうえで重要と考えられる古墳のフィールド調査(測量・発掘調査)を実施する。九州島西側の熊本県地域では、研究代表者・杉井健が主担当となり、阿蘇谷に築かれた古墳を調査・分析する。具体的な調査対象は、平原古墳群、および上御倉古墳・下御倉古墳である。他方、九州島東側の大分県地域では、研究分担者・田中裕谷が主担当となり、豊後大野市周辺に築かれた古墳を調査・研究する。具体的な調査対象は、漆生古墳群である。

(2) 阿蘇地域に関連する古墳出土資料の調査・研究を行う。具体的には、研究分担者・志賀智史は、ベンガラを中心とした赤色顔料の調査・分析を行う。また、研究代表者・杉井健は、熊本県高森町高塚横穴群出土遺物および同横穴群 1988 年発掘調査時作成図面・写真の整理、調査・分析を行う。

(3) 以上の調査・研究によって得られた成果を総合し、地域住民を対象にした調査研究成果報告会を開催するとともに、幾度かの共同討議を経て研究成果報告書を編集・出版する。

4. 研究成果

当初の研究期間は 2014 年度から 2017 年度までの 4 年間であったが、その前半の 2 年が経過した 2016 年 4 月に平成 28 年熊本地震が発生した。それにより、研究代表者・杉井健がフィールド調査の対象としていた阿蘇谷の古墳の安全性が十分に確保できなくなり、また調査協力を受けていた地元自治体にも大きな被害が発生した。そのため、2016 年度は阿蘇地域でのフィールド調査のすべてを中断した。このことを理由に、補助事業期間を 2018 年度まで 1 年間延長したが、そのおかげもあって何とか以下のような研究成果をあげることができた。

(1) フィールド調査(測量・発掘調査)

熊本県阿蘇市平原古墳群において、6号墳の墳丘および墳頂部の発掘調査、2・3号墳の測量調査、さらに1981年に調査され未報告のままとなっていた1号墳石棺およびその出土遺物の調査を実施した。その結果、6号墳は、主体部構造の確認には至らなかったが、葺石を良好に残す2段築成の円墳(直径30~31m)であること、3号墳は方墳の可能性あることが示された。また6号墳の時期は古墳時代中期前葉から中葉、3号墳は中期後葉と推測された。このことから、平原古墳群の造営時期は、長目塚古墳を盟主墳とする中通古墳群のそれと重なる可能性が高くなった。この成果は、中通古墳群のみに注目して阿蘇谷の古墳時代中期を考察することの多かった従来の研究動向に警鐘を鳴らすものとして重要である。諸般の事情により、平原古墳群の調査は2015年度以降実施できていないが、今後、何とか再開できるよう関係各方面との調整を行いたいと考えている。

阿蘇市上御倉古墳・下御倉古墳の測量調査を実施した。上御倉古墳については墳丘と石室を、下御倉古墳については墳丘を測量した。その結果、上御倉古墳は直径37~38mの円墳で、主体部は菊池川流域の横穴式石室と同じ複室構造、かつ石屋形を有するものであることが、一方、下御倉古墳は直径30m程度の円墳であることが明らかとなった。また、上御倉古墳は6世紀後葉頃、下御倉古墳はそれよりも若干さかのぼる時期の築造と推測された。さらに、上御倉古墳の横穴式石室は、大分県別府市鬼ノ岩屋1号墳の横穴式石室と酷似することが指摘されたが、これは九州島の東西を結ぶ交流の実態を指し示す事実として重要である。

大分県豊後大野市漆生古墳群において、4基の古墳すべてを測量・発掘調査した。その結果、大久保1号墳(前方後円墳)と城山古墳(円墳)は前期後半に、「石棺蓋(石蓋)岩盤剥抜き」を主体部とする大久保2号墳(円墳?)と3号墳(円墳?)は中期後半に位置付けられた。この成果は、同じ古墳群にある古墳といえども累代的に継続して築造されているわけではないことを示しており、古墳群の形成過程の評価に一石を投じるものとして重要である。

(2) 古墳出土資料の調査・研究

阿蘇地域の古墳出土のベンガラを理化学的に調査・分析した。その結果、上御倉古墳のベンガラだけにパイプ状粒子と螺旋状粒子が含まれていること、また下御倉古墳のベンガラには砒素や鉛が含まれていることが明らかとなった。阿蘇谷西部に産する褐鉄鉱起源のベンガラは不定形粒子のみで形成され砒素等を含まない。したがって、これら2古墳には阿蘇谷西部産のベンガラが用いられていないことになる。このことは、古墳時代後期になると阿蘇谷西部産のベンガラの利用頻度が低下する可能性を示しており重要である。なお、砒素を含む下御倉古墳のベンガラは大分県別府市周辺に産するものである可能性が高いこと、上御倉古墳のベンガラは古墳所在地周辺の湧水地点で採取されたものである可能性があることが指摘された。

熊本県高森町高塚横穴群出土遺物および同横穴群1988年発掘調査時作成図面・写真の整理、調査・分析を行い、詳細な実測図と写真を用いた報告書を作成・出版した。その結果、高塚横穴群は古墳時代中期後葉から後期中葉まで造営されたこと、その横穴の構造は宮崎県高千穂町域を中心とした五ヶ瀬川流域の横穴と同じであることが明確となった。また、副葬品には、圭頭鏃と長頸鏃の特徴を併せもつ長頸柳葉鏃や平根系の圭頭鏃、弱い山形突起を有し腸袂が弧を描きながら外側に開く平根系の腸袂柳葉鏃、骨鏃、主環の断面形が円形の小環付鉄釧といった南九州との密接な関連をうかがわせるものが多いことが指摘された。さらに、横板鉾留短甲の出土から、近畿中央政権との密接な関係を有することも示唆された。すなわち、高塚横穴群は、阿蘇火山の山深い谷あいにも営まれているが、それは南九州を中心とした九州島の各地さらには近畿中央政権とも密につながった首長により造営された横穴群であると評価された。

(3) 阿蘇地域を介した情報伝達・文物交流の具体像

フィールド調査および古墳出土資料の調査・研究によって明らかとなった九州島内における地域間交流の具体像のうち、重要なものをあらためて整理すれば次のようになる。

熊本県阿蘇市上御倉古墳の横穴式石室と大分県別府市鬼ノ岩屋1号墳の横穴式石室は構造的に酷似する。

熊本県阿蘇市下御倉古墳に用いられたベンガラは大分県別府市周辺に産するものである可能性が高い。

大分県豊後大野市漆生古墳群の大久保2号墳、3号墳の主体部構造 - 石棺蓋(石蓋)岩盤剥抜き - と同種の墓制は、熊本県山鹿市灰塚古墳や同県宇土市西潤野1号墳に認められる。

熊本県高森町高塚横穴群には、南九州との密接な関係をうかがわせる副葬品が多く収められている。

(4) 今後の展望

上記(3)にまとめた ~ は、いずれも古墳時代中期以降の特徴である。これをふまえ、今後の展望を以下に述べる。

弥生時代後期の阿蘇地域では鉄関連遺物・遺構の出土がきわめて多いことが知られている。その背景についてはいまだ定説はないが、阿蘇谷西部に産する褐鉄鉱を原料として当該時期

に鉄精錬が行われていた可能性を検討の俎上に載せてもよいのではなかろうか。それが認められるとすれば、阿蘇谷西部で隆盛を誇った弥生時代後期の集落が古墳時代前期に継続しないことの影響も構想しやすくなる。すなわち、古墳時代前期、近畿中央政権が北部九州地域の勢力と結びながら朝鮮半島南部に産する良質な鉄素材の安定した入手に成功し、それを鍛錬しての優良な鉄器の大量生産が可能となったことにより、北部九州勢力にとっても、輸入鉄素材の加工に比べると非効率な阿蘇産褐鉄鉱を原料にした鉄精錬および鉄器生産にわざわざ頼る必要がなくなった。このように構想することができるのではないだろうか。

古墳時代前期における阿蘇カルデラ盆地の古墳や集落の様相には不明な点が多いが、中期以降に比べて前期はその地域活力が大幅に低調であったことは認めてよいと考える。そうした視点で周囲をながめると、大分県竹田市七ツ森古墳群までは三角縁神獣鏡がもたらされているから、九州島の東西を結ぶ阿蘇ルートのうち、七ツ森古墳群が位置する菅生台地と阿蘇カルデラ盆地とのあいだは極端にその連絡の程度が低下したと想像できる。そのような視点をもとに今後考察すれば、古墳時代前期の九州島における地域間交流の実態をより明確に描き出すことができるのではないかと展望する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

杉井 健、「集落と古墳の関係についての理論的整理」、『先史学・考古学論究』第7巻、査読無、2019、pp.201-217

田中裕介、「豊後大野市の古墳群からみた地域社会と首長像」、『古墳時代阿蘇ルートの研究 - 阿蘇地域に築かれた古墳に着目して -』、査読無、2019、pp.111-133

機関リポジトリ：<http://hdl.handle.net/2298/42102>

志賀智史、「熊本県阿蘇地域の墳墓から出土した赤色顔料について」、『古墳時代阿蘇ルートの研究 - 阿蘇地域に築かれた古墳に着目して -』、査読無、2019、pp.135-144

機関リポジトリ：<http://hdl.handle.net/2298/42103>

Morooka Ken'ichi, Matsubara Ryota, Miyauchi Shoko, Fukuda Takaichi, Sugii Takeshi, Kurazume Ryo, 'Ancient pelvis reconstruction from collapsed component bones using statistical shape models', *Machine Vision and Applications*, 30, 査読有、2018、pp.59-69
DOIコード：0.1007/s00138-018-0972-5

杉井 健、「古墳時代中央政権の外交政策と国家形成」、『待兼山考古学論集』第3巻、査読無、2018、pp.201-217

田中裕介、「速津媛伝承と別府の古墳群」、『大分県地方史』第231号、査読無、2017、pp.1-32

杉山秀宏・志賀智史、「赤玉について～朱玉との比較から～」、『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第36号、査読無、2017、pp.47-66

杉井 健、「三次元データの重要性 - 阿蘇市上御倉古墳を事例に -」、『九前研通信』第34号、査読無、2017、pp.5-8

志賀智史、「城野遺跡の方形周溝墓から出土した朱の産地について」、『北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室研究紀要』第31号、査読無、2017、pp.43-48

志賀智史、「鏡迫古墳群出土の赤色顔料について」、『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』第28号、査読無、2016、pp.97-106

志賀智史、「水分遺跡第5・7次調査出土の赤色顔料について」、『久留米市文化財調査報告書』第364号、査読無、2016、pp.69-80

杉井 健、「熊本県阿蘇市平原古墳群の調査概要」、『九前研通信』第30号、査読無、2015、pp.4-9

〔学会発表〕(計3件)

杉井 健、「集落と古墳 - その関係についての理論的整理と1つの事例 -」、『九州前方後円墳研究会第21回鹿児島大会、2018

志賀智史、「朝鮮・三国時代の鞍装飾の一例」、『文化財保存修復学会第39回大会、2017

志賀智史、「阿蘇石製石棺に採用された赤色顔料について」、『日本文化財科学会34回大会、2017

〔図書〕(計9件)

杉井 健編著、他、熊本大学文学部、『古墳時代阿蘇ルートの研究 - 阿蘇地域に築かれた古墳に着目して -』、2019、本文 p.150・図版 p.50

機関リポジトリ：<http://hdl.handle.net/2298/42101>

田中裕介、他、豊後大野市教育委員会、『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』9、2019、p.30 (pp.11-16)

杉井 健監著、安原真衣・山元瞭平編著、熊本大学文学部考古学研究室、『考古学研究室報告』第53集、2018、本文 p.68 (pp.53-68)・図版 p.20 (pp.10-20)

田中裕介、他、豊後大野市教育委員会、『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』8、2018、p.30 (pp.5-13)

田中裕介、他、豊後大野市教育委員会、『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』7、2017、
p.48 (pp.5-14)
田中裕介、他、豊後大野市教育委員会、『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』6、2016、
p.48 (pp.5-13)
杉井 健監著、與嶺友紀也・入江由真編著、他、熊本大学文学部考古学研究室、『考古学研究
室報告』第50集、2015、本文 p.66・図版 p.10
田中裕介、他、豊後大野市教育委員会、『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書』5、2015、
p.41 (pp.5-12)
志賀智史、他、LIXIL 出版、『大地の赤 - ベンガラ異空間 - 』、2015、p.64 (pp.22-25)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201808shimomikura/201808shimomikura.html>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201708kamimikura/201708kamimikura.html>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201509kamimikura/201509kamimikura.html>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201408hirabarbaru/201408hirabarbaru.html>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：田中 裕介

ローマ字氏名：(TANAKA, Yusuke)

所属研究機関名：別府大学

部局名：文学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁) : 30633987

研究分担者氏名：志賀 智史

ローマ字氏名：(SHIGA, Satoshi)

所属研究機関名：独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館

部局名：学芸部博物館科学課

職名：主任研究員

研究者番号 (8 桁) : 90416561

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。